

平成 27 年度第 1 回ナベヅル、マナヅルの新越冬地形成等検討会 議事概要

日時：平成 27 年 7 月 10 日(金) 9 時 30 分～12 時 00 分

場所：出水市ツル博物館クレインパークいづみ

1. 議題 1 (1) これまでの経緯、(2)平成 26 年度の業務報告

○ナベヅル、マナヅルの新越冬地形成のための手引き(マニュアル)について

- ・P.9 の 1-2 について、自然越冬地になる谷津環境は有害鳥獣被害対策のホットスポットでもある。今はわな猟が一般化しているので、そうした関係者との調整も必要だと思う。(塩谷)
- ・P.1 の「はじめに」で、ツルが来るということは、その環境が良いということ。ツルだけでなく環境全体を保全する中にツルがいる、というような概念を追加するとういと思う。(高見)

○高病原性鳥インフルエンザに伴う出水市における野鳥検査・回収状況について

- ・合計は 351 羽だった。内訳は、カモ類 227 羽、ツル 83 羽、その他 41 羽。ツルはナベヅル 73 羽、マナヅル 8 羽、判別不能(カラス等に食べられて損傷が激しい)が 2 羽だった。なお、収容したものはすべて検査することになっていたが、カモ類 160 羽の大量死が発生した時は、農薬が原因と思われたため、一部を抽出して鳥インフルエンザの検査を行った。(寺原)
- ・鹿児島大学では毎年糞便調査を 400 検体以上実施している。昨年度は弱毒性の H11N9 亜型のウイルスが 1 株分離された。過去十数年の検査で、弱毒性ではあるが初めてツルの糞便からウイルスが分離された。ツルが高病原性鳥インフルエンザウイルスを国内に運んでいるのではないかと誤解されることがあるが、これまでの死亡ツルの調査等含め、ツル以外の野鳥(カモ類)がウイルスを運び入れ、ねぐらの水等を介してツルに感染していると推測される。(高瀬)
- ・県内でヒドリガモとオナガガモの飛来数が最も多いのは出水。特にオナガガモは突出して多い。2000、3000 羽がツルの餌についている。夜間のカモの状況も調査した方が良くと思う。(溝口)

○出水市における新越冬地形成等に関わるヒアリング調査について

- ・農業関係者、教育関係者(中学校)、観光関係者、ツル保護監視員等を対象に実施した。今の状況をどう思うかや特に興味のある範囲について話しをしてもらい、現状認識、ツル又はカモに関する課題について意見を収集した。(関)
- ・それぞれのステークホルダー間で利害が一致するところがあるのか、相反するものがあるのか等教えてほしい。(菊地)

2. 議題 1 (3) 韓国順天(スンチョン)湾の事例紹介

- ・過去にテグ市に 200 羽程度ナベヅルが越冬していたが、ビニールハウスが増えたことにより、1995 年に越冬地が消えた。1996 年に順天湾でナベヅルが 60 羽程度が確認された。干拓地の広さは東西 4.5km、南北 3.5 km。干潟に干拓地が隣接している。
- ・P.3 の採食資源調査は 2 月下旬のデータで、上の表がツルが群れでよく利用している場所、下の表はあまり利用していない場所を示している。ツルがあまり使っていない場所は大量の靫があ

り、ツルが使っている場所でもまだ残っていて、この時期でもまだ十分餌資源があることが分かった。

・当時すでにカメラマンが来ていて、接近による阻害が見られた。現況ではビジターセンタ等が建てられ、ナベヅルをテーマとした都市づくりが進み、湿地もラムサール湿地に登録されており、保全が進んでいる。現在は 1000 羽まで越冬数が増加している。

○順天湾と出水の個体群の関連について

・出水の個体数は減っていないが、順天湾で現在 1000 羽まで増えたということは、広い視点で見ると分散化が進んでいると言えるのではないかと。(高瀬)

・出水の数も増えているので、分散化が進んだとは言い難いと思う。(金井)

・知る限りでは日本で付けた標識個体は順天湾で確認されていないので、順天湾の個体群と日本の個体群との関連はあまり強くないのではないかと。(尾崎)

3. 議題 2 平成 27 年度の新越冬地形成等業務案

○地域への働きかけに関する体制等について

・地域のなかにツルをどう入れ込んでいくか、戦略を作る体制を整える必要があると思う。地域での体制、研究者等のバックアップ体制、企業等民間団体との連携など。ツルが来ることがわくわくするような雰囲気を作らないと、地元には受入れられないと思う。(島谷)

・ツルだけを目標としてしまうと、ツルが来ないと成果にならず、続けるのが厳しくなる。ツル以外で面白いところ、楽しいところを目標のステップの一つとして入れた方が良い。(金井)

・地域の人と共通の夢を持つことが重要だと思う。今回のような場より、もう少し柔らかい場でみんなで話し合うのが良いと思う。(呉地)

・資料 5-5 で合意形成が挙げられているが、その前にまずは情報の共有が必要。候補地域の自治体、民間団体等の関係者と年に一回情報交換できるような場を事業化したらどうか。(羽山)

4. 議題 2 新越冬地形成等の各手法の検討

○ビニールハウス式の捕獲手法について

・参考資料 5-4 の図 2 の罟はツルは簡単には中に入らず、採餌スキルが弱い個体が入る。例えば家族の場合、幼鳥が入ると親が入る。マナヅルはナベヅルが入ると入ってくる。(塩谷)

・ツルの利用状況によってどんな個体が入るか変わる。過去に山階鳥類研究所で無双網を使った捕獲をしたことがある。(溝口)

○捕獲せずに誘導する方法について

・例えばデコイの設置があるが、大きな効果を上げている例はない。国外でアメリカシロヅルやカナダヅルで飛行機を使って越冬地へ誘導した事例があり不可能ではないが、日本にやってくるナベヅルの繁殖地から越冬地のコース上には政治的な制約や海があるため、現実的には厳しいと思う。(尾崎)

○高病原性鳥インフルエンザについて

- ・昨年からの台湾やアメリカの流行の状況等を考えると、ここ1-2年は様子を見ながら計画を作る必要があると思う。例えばツルを捕獲した場合、出水平野あるいは近辺で鳥インフルエンザが発生した場合どこで放鳥するか困ると思う。計画通りに進められるか懸念している。(高瀬)
- ・出水だけの問題なく、全国一律の問題。ツルが数十羽、千羽増えようが、地域のリスクは変わらないと思う。これをどうやって一般の人に伝えるかが難しい。全国的な飛来状況や地域にどのくらいガンカモ類が来ているのか理解してもらいつつ、様々な野鳥が暮らせる豊かさやツルが来る素晴らしさを伝える必要があると思う。一方で、養鶏業関係者には現況や科学的なことはしっかり伝えていく必要がある。(金井)
- ・感染の経路は解明されていない。ウイルスの遺伝子配列の解析は行われ、ルートが推定されたことはあるが、実際にどうやってウイルスが持ち込まれたか証拠はない。(高瀬)
- ・感染症の問題は社会的に大きな問題。例えば東京でデング熱が出ると、東京の湿地すべてを埋めてしまえという極端な意見が出る。鳥インフルエンザの問題はトキやコウノトリをはじめ野鳥の取組の際は発生すると思う。科学的な説明はしっかり行う必要があると思う。(島谷)

○今後の進め方について

- ・資料5-1~4についてはやるべきことが具体的に決まっており、サイエンスに基づく部分が大きい。具体的な内容は、科学チームを作った方が議論が進みやすいのではないかと。(高見)
- ・5年、10年等のタイムスケジュールを作る必要がある。(尾崎)
- ・今回の案は主語が入ってないので、今後アクションプランにしていく際には具体化する必要がある。しっかりとした内容でなくとも法定計画はなるべく早く作った方がいいと思う。(羽山)
- ・越冬地形成の場所がある程度目星がいたら、河川改修や圃場整備等の計画に早めに相談した方がいい。長期計画に入れられる。(島谷)
- ・今回は関係行政がオブザーバーという形だが、協議会のように活発に議論できる場も必要だと思う。(羽山)

○その他

- ・目標として、ツルの越冬地の本来の生活に戻すということを強調した方がいいのでは。(金井)
- ・人為的移送は時間がかかるので、並行して自然な越冬地の拡大を考えていく必要があると思う。ハクチョウの場合、鳥インフルエンザが起きた時に餌付けを辞めたところ、生息地の分散が起こった。特に鳥が死んだという問題は起きなかった。ツルの場合もまずは給餌への対策をやるべきだと思う。突然給餌量をゼロにすることは難しいと思うが、生息圏を広げることにより、その中から越冬地としてもポテンシャルがあるところが見つかるかもしれない。(呉地)

以上